

議 事 概 要

【第8回北陸地域連携プラットフォーム 平成27年12月3日(木)】

【メンバー】

多くの自治体で地方版総合戦略ができ上がっていますが、総論を見ていると、何か大人が作り出したという感じがある。これは本当に、30年、40年後を生きていく現在の子供たちにはどう響くのかなという観点で見たときに、全く魅力がないだろうと感じました。

プラットフォームの今後の進め方の1つに、是非若い方の御意見をいただきたいと思います。学生は実は意外と頭が固いということを常日頃感じています。実際に話をしていると、結局彼らの意見は彼らの親御さんにずっと言い含められてきたことを話していて、彼らの親御さんはちょうどバブル期に入社した方々なので、右肩上がりに経済が良くなる世界を見てきた中で、学生たちは就職で福井に戻ってくるなら大手企業や公務員など安定した職に就いてほしいという思いを押し付けられている。そういった凝り固まった考えを壊して、もう一度本当に自分が欲しいものを見詰め直してほしいと思います。そのような考え方が少しずつ外れてくるのが30代なのかなと思うと、この30代の方々が何を考えているのかということが、地方版総合戦略には織り込まれていないような気がします。

例えば、移住・定住促進施策では、福井県鯖江市が「ゆるい移住」の事業を行っていますが、家は用意しました、しかし、仕事は斡旋しませんし、家具も何もない。何人来るか、どんな人が来るかも知りません。そこに17人がやって来たというのは全国的にも大きな数だと伺っているのですが、しかし、恐らく、彼らの思考回路は全く違って、若年層の多様性に対し、大人の画一的なものの考え方の中に押し込めようとしている感じがする。その多様性にどう対応するかということがこれからの課題であり、若者だけではなく、例えば、外国人という多様性もあるのかもしれないし、働き方、生き方、結婚観なども多様であって、総合戦略はこれらをまとめてきれいにでき上がってはいるのですが、これを30年、40年後を生きる今の若い人たちが、果たして望んでいるのかなと思うと、少し懐疑的なところがあるなと思いました。

【メンバー】

本日の午前中に出席した富山県の懇話会では、30代の若い人だけを集めた分科会を行っているということなので、それが参考になるのではないかと。

全体の今後の進め方ということで、このプラットフォームが始まったときの歴史を考えた方が良く考えるが、2014年の1月はまだ地方創生と言われる前段階だったと思います。当時の北陸財務局長が、やはり地方の状態は憂うべきものがあるという話の中で始まって、様々な事例紹介や、こういう形で今の状況を我々はシェアしてきたわけですが、今、各自治体が、良いか悪いかは別として、地方版総合戦略を策定した状況だと思うので、今度はこのプラットフォームのあり方自体、今までとちょっと違った風にやっていかなければいけないし、各地方自治体がやっていることを後なぞりするようなことをやってもしょうがない。何か役割分担の確立をもう一度、改めて今の環境の中で考えて何をすべきなのかを再構築すべきなのかなという感じがしています。

その中で1つの切り口は、各地方自治体はそれぞれ個々の部分になるでしょうから、やはり北陸地域全体、あるいは自治体同士のシナジーだとか連携というもの、それから北陸地域全体に共通する資源、あるいは問題など、そこをうまく整理されるのが1つの今後のあり方としては考えられることなのかなという感じがいたします。

【メンバー】

中間整理は御説明いただきまして、非常にわかりやすくきっちりおまとめいただいていると思うのですが、具体的なことに関しては、なかなかこういうまとめ方は難しいのかなと思います。それと、プラットフォームの一番の問題意識が人口減少問題であったと初めに書いてありますが、個人的には、人口減少問題を各地域が個々で考えて、先程もありましたが、家だけ建てて移住してよということ各地域がやっても、基本的に人口減少問題の解決にならないだろうという感じがしております。

よくシラク3原則と言われますけれども、そういった方針を国がしっかりと立てて、そして国全体として人口減少問題に対応するという政策や施策が非常に大事だと思います。危機意識を煽るという段階で各地域が頑張れよと、そこまでは良いのですが、実際に政策の効果を高めようと思ったら、もう少し国が真剣になるべきであり、地域で考えろ、ビジョンを作れと各地域に任せきりでは、人口減少問題は解決しないだろうと考えております。

それから、女性の活躍社会について、北陸は女性の就業率が高い、女性が活躍していると短絡的に結び付けられておりますけれども、例えば福井の場合をみると、確かに就業率は高いですが、管理職や正規雇用の割合は非常に低いと思います。あくまでも補助的な仕事で女性の就業率が高いというのが現状ですから、本当に女性が社会進出をするには何がネックになっているかということを考えていく必要がある。女性の性格もあると思いますが、福井の場合では、女性に管理職に就いてほしいと言うと、「いや、私は家庭がありますから結構ですよ」、「ほどほどの仕事で良いのです」と、これも現実なのです。決してこれが悪いわけではない、こういう生き方もあるということですから、先程、多様性の話もありましたが、やはりそういう問題にも深く突っ込むべきだろうなと思います。

それからもう1つは、日本経済研究センターがまとめた資料によりますと、決して東京一極集中ではないと。やはり6大都市に集中しているのであって、いわゆる拠点都市に集中していますよと。そういう観点からいうと、北陸は拠点都市が、金沢になるのかもしれませんが、まだそこまで至っていないと思います。北陸の魅力をもっと上げるためには、北陸の拠点となる都市をまず構築して、それに関連した都市のネットワークで北陸全体を盛り上げていくという発想に各県がならないと、北陸全体がなかなか浮上することはないだろうと考えております。

やはり北陸3県というのは、先程シナジーという言葉がありましたけれども、非常に相通じるものがある1つのまとまった地域ですから、行政の区域で線を引っ張ってどうこうというのは置いておいて、経済圏として北陸地域をもっと高めようという方向性を目指していけたら良いと思っております。

【メンバー】

この北陸地域連携プラットフォーム中間整理、内容については本当に良くできていると

と思いますが、こういうことは各地方でもそれぞれ同じようなことをしておられるのかなど。いかに北陸として特色を出しながら具体的に進んでいけるかということが必要じゃないかと思います。

人口減少、これは、要は若い人に早く結婚していただく必要がある。企業間の若い人たちの交流など、結婚を目指しながら異業種の交流を積極的に進めていくべきだろうと思っております。

それと、先程の話にもありましたが、若い人はどう考えているのかということです。10年後、20年後、30年後、どういう未来になるのかということで1つ思い出したのは、2011年にアメリカのデューク大学の先生が仰った、今年小学校に入学した子供が大学を卒業して就職する頃には、このうちの65%の人が今は無い職業に就いていますよという予言をされて、大変大きな話題になったと記憶しております。

ですから、今、IoTなどを盛んにやっていますし、企業もそういう方向にどんどん進んでいる。第4次産業革命という中で、今の状況と10年後の状況はかなり違ってきている。例えば今、会社の中で行っている仕事が在宅でできるようになる、その辺は今想像できないほど10年後は違ってくると思います。

それから、先程の若者が本当に主体性を持ってということについて、例えば、子供の就職に親が口を出し過ぎる傾向があり、どうしても大企業に行ってしまう、ベンチャー企業がなかなか育たない。先日の新聞で大学の奨学金は親の収入によって限度を決めるというような記事がございましたけれども、アメリカ、ヨーロッパ辺りは、18歳、20歳になったら独立しなさい、学校に行こうが何をしようが仕送りはしないよということが一般的な考え方でして、ですから彼らは、勉強したい人は一生懸命勉強して、親から仕送りがありません。奨学金をもらいながら、それをまた返すのが大変だということです。日本は親離れというものをしてなさ過ぎるのではないかと思います。まずは結婚していただきたいと思いますので、企業としてもそういう場をつくっていきたいと思っています。

【メンバー】

今後の進め方につきましては、具体的な施策等をテーマとして議論していくことは非常に良いと思います。能登地域、伝統工芸、移住・定住、最近よく言われている二地域居住、更にはマルチハビテーションなど、非常に色々なテーマがあると思います。ただ、一番の課題はやはり「北陸新幹線という追い風を最大に活かす」ということだと思います。

さて、最近の当会の活動をご紹介します。本件についてご意見を申し上げたいと思います。まず、11月11日に（一社）日本経済団体連合会（経団連）の会長、副会長の皆さまが北陸にお見えになり、当会と経済懇談会を行いました。「豊かで活力ある日本へ～魅力あふれる北陸の創生～」というテーマにて、新幹線をはじめとする交通インフラ、広域観光、産業競争力強化、女性や若者の活躍などについて、意見交換を行いました。「北陸を地方創生のモデルに」ということで、当日のマスコミにも大きく取り上げていただきました。また、11月17日には、北陸新幹線の全線開業に向けた整備促進について、北陸新幹線沿線の各県知事らとともに、東京にて合同中央要請を行いました。

11月20日には、東京で開かれた日本創生委員会での太田前国土交通大臣のご講演において、北陸新幹線が非常に高く評価され、具体的な例を挙げながら紹介していただきました。これは首都圏の方々も大きく評価していただいている証拠ではないかと感じています。

続いて11月30日の国土交通省の会議においては、「北陸は産業集積、教育、住みやすさなどのレベルが高く、様々な発展の可能性がある。我々は北陸こそ地方創生のモデルとなり得る地域と考えており、今後も取り組んでいきたい」といった話もさせていただいております。

やはり社会インフラ、何といたっても北陸新幹線の整備促進が第一であることについては、揺るぎないところですが、関西や中部との連携、あるいは関東も含めて、日本の中央に位置する強力なエリアをつくることによって、新産業の創出、あるいは広域観光周遊ルートの形成、災害のバックアップなど、色々な問題を解決していけるのではないかと考えています。

北陸は「地方創生のモデル」となり得る地域であり、これをキーワードとして、今後議論をしていきたいと思っております。

【メンバー】

今回お聞きしたこれまでの取りまとめの方向性なり今後の進め方については、それほど特段の違和感はありません。1つだけ、重ねての意見になるかもしれませんが、例えば、具体的な内容の中で期待されていますような市町村レベルでの人口ビジョンというのは、恐らく皆様方もお感じになっていらっしゃるかとおり、あまり意味を持たないということが、我々も各市町村レベルの総合戦略の策定に携わって実感しているところでございます。

やはり人口ビジョンに対する対応は、国レベルで何らかの指針を取りまとめていただいて、それに対して地方がどういう形で参与、参画していくかというのが有効な進め方ではないのかという、個人的な考えを今のところ持っておりますので、そういう中で、各市町村レベルの細かい話を我々も議論の対象にしない方が振り回されずに済むのかなという感想を持っているところです。

また、多様性の問題については、人口減少もGDP、国力を維持するための1つの考え方として出てきているのだらうと思っておりますが、そもそも、そういう生産力を1つのキーにした尺度で、従来型の発想でそれを維持するための考え方を議論するというのは、本当にこれからの若い世代、新しい世代にとってどれぐらいの意味を持つのかということについては、ちょっと立ち止まって考える必要があるということは再認識をさせていただきました。そうした色々な各界の皆さん方のご意見をこういう場で、積極的に前向きなスタンスで議論させていただく中で、最終的には地域連携のプラットフォームですから、やはり自治体ごとではなかなか進め切れない部分を、我々のプラットフォームがしっかりと下支えをして、北陸地域として一体感のある方向に少しでも導けるようにしていきたいと考えております。

【メンバー】

中間整理の方向性については全く異論がございません。やはりこれだけのメンバーの方が集まって具体的な事例をどう発信していくかというのが一番大事なことだと思います。今後の進め方については、地域金融機関の具体的な取組について、私どもはどういうことができるかということを考えながらやっていく中で、少し申し上げますと、大手企業の技

術ニーズに対して、全国の色々なコーディネーターが技術力に秀でた中小企業を推薦し、その技術力を大企業とマッチングするという事を10月から行ってありますが、成約したものは別にして、既に80件ぐらいの話があります。ドラマ「下町ロケット」ではないですけども、そういった確かな技術力を持った企業が北陸3県にはたくさんあると思いますので、その発信は当然ながら重要なことだと思います。

それと、UIJターンということで、私ども民間の人材事業者と連携してマッチングすることもやっております。件数としては11月から15件ぐらいあるのですが、その中で、中途採用で、北陸3県出身で、その方たちが地元に戻りたいという希望でホームページに申込みが来るのですが、最後の最後で奥さんが嫌だと言うのです。やはり奥さんが来たい北陸3県にしなければいけないと思います。そのためには、学校の問題など、北陸3県が主要都市にも匹敵するような魅力あるまちづくりをやっていく必要があると思います。

また、移住、住みかえについて、都会に土地や家を持っている人を移住・住みかえ支援機構（JTI）さんに繋いで、空き家を借りますよという取組をしています。これは11月から始めましたが、今のところ実績はありません。今申し上げたような、やはり魅力ある形に持っていくことが一番重要なことではないかと思っています。

【メンバー】

中間まとめについては私も全く異論はございませんし、とりわけ能登に住んでいる一人として、色々ご意見もありましたが、以前に福井県鯖江市の事例の紹介がございました。非常に参考になりましたし、能登にもそういうことを考える必要があるのかなと思って聞いておりました。

地域の連携という趣旨では色々な取組が始まっているわけでありまして、先程御説明いただいた人口推計の中には、現在は能登地区に9市町がありますが、国勢調査では21万1千人、現在は20万を切っておりますが、それが2060年には7万8千人という数字が出ています。この現実を見たときに、大変御無礼な話かもしれませんが、市町で色々総合戦略、あるいは人口ビジョンを作っておられますが、どれだけ頑張っても人口は倍にはできないと思いますし、最初からお話があります地域の連携、市町の枠を超えた連携をもっともっと進めていく必要があるのではないかと考えております。

1つの事例で申し上げますと、先般、氷見市の商工会議所と七尾市の商工会議所が色々連携して、協議しましょうということスタートいたしました。これは能越自動車道の開通が、隣の町であって近くて遠い関係であった氷見市と七尾市を結びつけるきっかけとなったわけですが、この中で商工会議所、あるいは商工会議所青年部、女性会、そういう色々なところで協議していく。すなわち県の圏域のハードルを少し下げていく、こういったこともこのプラットフォームの役割なのではないかと考えており、これからも進めていきたいと思っています。

【メンバー】

私から2点ございまして、まず1点目ですが、私も石川県内の地方創生の会議に委員として出席をさせていただいて、その中で気付いたことですが、10月末で基本的には戦略を作って提出するという事で、皆さん慌てたところもありました。そして一応はでき上が

ったけれども、中身を見ると、項目とK P Iとの整合性ができていないなどの事例がみられました。それぞれの戦略、項目について、予算はこれからですという所がほとんどで、話し合いの中でもよく出たのですが、予算があまりつかなかったならそれぞれの項目はどうなるのかというと、シーンとなってしまいます。結局、地方創生というのは、人口問題にしても、どんな施策にしても、言い方は悪いかもしれませんが、やはりお金がないとできないということだと思えます。

もう1つは具体性。これは企業と地方公共団体は違うかもしれませんが、中期経営計画と同じで、お金がついて、具体性がある初めて回るということだと思えます。それに関してどうやっていくかというのは、やはり地方創生に係る具体的な施策をこのプラットフォームで提言していくことが重要。その内容をモニタリングしながら、みんなで提言していくことが非常に大切なのかなと思えます。そうでないと、先程からお話があった大企業にみんな勤めたがるということや、いつの間にか日本、地方も全て、どんなに小さなリスクも取らないし、自立をあまりしたくない、どこかにぶら下がりたいという気持ちが蔓延していく。地方創生を推進していくためには、少ないリスクを細かく取っていくなど自立の精神を地方に根付かせることが大切なので、そういうことをこのプラットフォームで全体最適の観点から提言していくことが重要。北陸3県で進めていく地方創生の全体像について、常にモニタリングして提言していくということが一番良いことで、私としても意見をこれから述べさせていただければと思います。

【メンバー】

富山の場合は、田中耕一さんも、新しくつくるのではなくて、やはり既存であるものを大いに活かそうという話もあったのです。

たまたま仙台の女性が金沢の会合に来ていらして、でも富山に宿泊すると言って昨日富山に立ち寄って下さいました。昨日の立山連峰は最高にきれいだったし、すごく良い時にいらして下さいました。彼女は「富山ってすごいよね」と仰っていました。(仙台は杜の都なのに富山が?)と思ったのですけれど、「富山には産業もあるし、文化もあるし、伝統もある。全てバランスがとれている。」「路面電車(ライトレール)も興味があったし、また、富山で電車に乗って砺波の散居村に行ったが、富山って便利なところだね、富山ってすごいところだね。仙台なんか問題じゃない。」と感動して言われたことがすごく誇りに思っています。富山の良さがちゃんと発信されているのだと、これも新幹線効果だとうれしく思いました。

新幹線効果を追い風にして、この北陸地域連携プラットフォームでは、産業を発展し、それぞれの県がそれぞれの良いところを持ち寄って、北陸3県として考えれば、それこそ全国の方に理解してもらえる。日本のど真ん中であり、一番安全な場所ということ。

また、先日、砺波へ九州別府の立命館の先生が15人ぐらいの外国の留学生を連れていらっしやったのです。「新幹線ができたし、ものすごく便利になったから、これから砺波の遊心亭を見た後ですぐに五箇山へ行く」と仰って、それだけ身近になった。グローバルに考えて、そういう意味で全て門戸を開くみたいな感じが私は良いのではないかなと感じ、このように新幹線効果があると思った次第です。

【メンバー】

私は金沢市への移住・定住の委員にならせていただいているのですが、先程お話がありました、その中に大学生が1人入っております。若者を交えた意見が必要であると思います。

それから、金沢市は、もちろん他にもそうだと思うのですが、空き家が非常に多くて、その中でも町家の活用にこれから力を入れるということですが、やはり北陸3県に定住していただく、学生さんも卒業されたら県外に行くのではなくて、もっと北陸3県の良さをどう出していくか、魅力を出して若い人たちによくわかっていただけて定住を促すという取組が必要ではないかと思っております。

それから、北陸3県には素晴らしい伝統工芸、芸能などがありますし、金沢は文化都市として、あるところでは今、北陸新幹線が開業してからは観光都市になっているのではないかといい声もありまして、そうではなくて文化都市だろうということで、もっと文化を表に出していく形を、北陸3県で手を組み合っできることがないかなと思っております。

このプラットフォームに呼んでいただいたときには、私は北陸3県が手を組んでやる、何かを決めるのかなという思いも少しありまして、この地方版総合戦略の先駆的的事业の中に、これだけの北陸3県、また4県にまたがる共同の事業があるのだなど。特に今、注目されている炭素繊維の事業なども、これからは楽しみだなど思っております。

先程ちらっと資料にありましたが、富山でも福井でもということは私も賛成でございます。

【メンバー】

これまでも御意見がたくさん出ていとおりで、せっかく北陸地域連携プラットフォームとして話し合ってきたので、北陸3県が連携、協力して少子化や高齢化の課題に取り組んでいくことについて引き続き考えていければ良いと思います。国は「地方創生」を強調し、県と市町村はそれに応じるような形でそれぞれの地方版総合戦略を作りました。ただ、国の期限に間に合うよう、慌てるように作ったところもあるようです。戦略をまとめること自体は悪いことではありませんが、策定そのものが目的になったとすれば、それほど大きな意味がないのでは、という気がします。各自治体はどうしても地方創生に関する国の予算が欲しいものですから、予算を獲得して少しでも課題解決に繋がりたいという思いがあるのでしょう。ですが、それぞれの地方自治体だけの取組ではどうにもならないというか、解決が難しい問題だという思いもしています。

ある程度大きな市であれば別ですが、小さな町、富山県でいうと朝日町などでは、一つの町で解決できるような問題ではないのではないのでしょうか。市町村それぞれに良いところもあれば悪いところもあって、良いところを活かしながら、デメリットの面については近接自治体、県を越えてもいいですし、助け合いながらクリアしていけるようなこともあるんじゃないかという気がします。

北陸新幹線が金沢まで開業し、もうちょっと年月はかかりますが、敦賀まで開業します。敦賀以西についてもなるべく早くルートを決めて、大阪まで早く繋がれば、東京と大阪という大都市圏を結ぶ新幹線の周遊ルートができます。北陸地方は今まで皆さんが言われたように産業集積もある上、観光面の素地もあります。潜在能力は大変高いところで、そういう意味では新幹線をうまく活かせるのではないかと思います。東北新幹線は新青森まで

開通していますが、青森の知り合いが「東北に比べて恵まれている北陸が大変羨ましい」と言っていたことを思い出します。

能越自動車道もまだ全通ではありませんが、無料なので、能登へ行くのにも大変便利になっています。そういうツールが揃ってきているので、それを活かした形で北陸3県の課題をクリアしていくことも可能ではないでしょうか。どうやってクリアしていくかということについて、この場で話し合っていければいいなと思います。

【メンバー】

この話はすごく皆さん前向きで良いと思うのですが、これは他の地域ブロックでも同じようなことをやっていて、同じように「やはり我が家は良い」という自慢話をしながら、「さはさりとは…」という漠然とした将来不安に苛まれている、そういう状況があるのかなと思います。

ただ、北陸に潮目が来たなと思うのは、我が国の人口減少、地方創生というキーワードを安倍政権が打ち出したのと軌を一にして北陸新幹線が金沢まで延伸され、止まったことです。止まって何が良いかというと、止まることによって金沢、富山がクローズアップされ、非常にピンポイントで露出していく効果があった。そうなっていくと、「どこかもう1県あったんじゃないかな」という形で福井という県が出てくることで、福井も必死になる。これがあと数年で敦賀まで開業し、さらに先のルートが実現すれば、あっという間に通過県になってしまう恐れがあるということです。

ですから、北陸新幹線はシナジー効果を含めて非常に戦略的な意味合い、価値は高いのですが、これはあくまで手段にすぎない。この潮目を短期間で戦略を高める武器としてどのように活用していくかがとても重要になる。みんなで、それに向かって突き進みましょうと号令をかけるのに非常に良いタイミングだと思います。

ただ、日本全体を考え、これからの北陸を考えた場合、日本は既に成熟してしまっているわけです。人口が減っていき、産業も海外に流出し、地域が衰退していくということが一層顕在化してくるわけです。しかし、成長一辺倒では、結局は選択と集中で切り捨てられ、勝ち組と負け組が明確になっていくのではないかと思います。地域として成り立たないところと、多極分散型の拠点として持続可能な地域になっていくところとが明確になっていく。

地方創生戦略にはある意味、淘汰と生き残りの論理が入っているのだと思います。そういう意味で、我々は試されているのだということを感じ、あまり国に対して過度の期待はできない面もある。その観点で考えれば、この場に登場された鯖江市の牧野百男市長が「鯖江から日本を変えていく」と述べられたことがとても重要ではないか。北陸から日本をつくっていくという未来創造型の戦略を前面に打ち出すために、キャッチフレーズ的に言えば「ダントツ北陸」をつくっていく必要がある。単に行政がまとめたものだけでは新たな創造性や知恵は生まれないのではないかと。委員さんたちが地域に散らばり、もう一度積み上げていく論理と方策が必要ではないかということを感じています。

今ある資源を活用し磨き込んでいくこと。もう1つは、若者が未来創造型の新たな価値をどうつくっていくかということです。そのためにはさまざまな素材を提供しなければならない。ただ「頑張れ」ということだけでは、若者は頑張らなくても満ち足りた成熟の世界にいるということを我々は危機感を持って考える必要があります。

北陸は今、日本で一番良い潮目にあるが、いずれ引いていく。そこで重要なのは「北陸独立共和国」を築くという高い志です。独立国をつくるのだという気概を持てば、何が足りていて、何が足りないのか、これからどのように可能性を伸ばしていけば良いのかを見極めることができる。こうした戦略を持って北陸圏を再構築していくべきであろうと思います。

【メンバー】

人口減の対策には特効薬がありません。効くか効かないかわからない漢方薬みたいなものを複数、できるだけたくさん用意して、それをやっていくしか手はないのだろうなと思います。

その中で、今後の進め方の1つの案として、こちらには高等教育機関がたくさんある、金沢は特に学都でありますし、高等教育機関が19あって、人口比でいうと全国3位。大学に進学するに当たって、県外に出るよりも県内に来てくれる若者が多いわけです。ところが、就職の際にほとんどが出ていく。先程も話がありましたけれども、今年のように就職内定率が高くなると、逆に、出ていく学生の率が高くなってしまって、地元としては喜んでいいのか悲しんでいいのかという状況になる。やはりせっかく地元で学んだ学生たちをどうやってこの地に引き留めるか、それをやっていかなければならない。雇用の場を増やすということは当然ですけれども、それ以外に、やはりこの地に住む、ライフスタイルというのは色々ありますから、地方に住んで豊かな生活を送る、そういうライフ・ワーク・バランスとしてもこの地は非常に優れているので、そういうことを学生たちにどうアピールしていくのか。今、学生が就活の時期になると、初任給はいくらだとか、世界シェアがどうだとか、待遇がどうだとか、そんなところばかりに目が行くのだけれども、生き方そのものを提案する、北陸で生きていく楽しさ、素晴らしさをわかってもらう、そういう取組も行っていかなければならないと思っています。

それと、もう1点、各自治体が今、色々な人口ビジョンの総合戦略を作っています。私も市町村から相談にのってくれと言われていくつか見ましたけれども、残念ながら、本当に作文です。作っている職員さんもそういう風に仰っていましたが、そんなものしかできようがないのです。けれども、それでも、例えばオール能登でできること、あるいは県境を越えてできること、これはあるので。一例を申し上げますと、婚活を一生懸命やっているところとやっていないところとありますけれども、やって大失敗したところ、例えば5年間、結構なお金を使って1組だけなのです。成婚率1組。それで、もう止めましたというところもあります。そうかと思うと、南砺市は婚活クラブがあって、この4年間で52組を成婚させている。たった5万人そこそこの都市で、4年間で、52組というのは非常に多い数字だと思います。どんなやり方をしているのかというと、昔、お節介なおばさんがいて、盛んにくっつけたがって非常に迷惑したのですけれども、それが有り難かったんですが、それを行政がやっているのです。そういうパーティーをやって、後は若い者にお任せじゃなくて、あそこのあの子はあなたのことを気に入っているよとか、コーディネートを一生懸命やるのです。その成果が52組です。

どこの市町村でもやっているのに、南砺市みたいに成功しているところと、諦めたところもある。だったら、南砺市のノウハウを教えることは十分できると思うのです。そういうことを、実は一生懸命この計画を作っていた職員さんは知らないのです。お隣の県でこ

んな成功例があるというのは知らない。そういう成功例みたいなものを提示して、こんなやり方もあるよというものを少しこのプラットフォームで成功例として見せて、自治体がやっていく中で参考になるようなものになってほしいと思うし、それがまたできると思っています。

この中にシェア金沢を定住促進で書いてありましたけれども、シェア金沢というのは非常に面白いやり方をしていますから、これも非常に参考になるし、能登で言えば春蘭の里という農村宿泊、これも大成功していますし、これも別に奥能登だけじゃなくて色々ところで色々な展開ができるものだと思いますから、こういう成功例を紹介して、やはりやっていくのは自治体なので、自治体に頑張ってもらうため、こんなやり方もあるのだと気付いてもらうための、そういう提案をこの会でしていけたら良いと個人的には思っています。

【メンバー】

総合戦略について、いくつか意味があると思っています。1つは、首長さんと意見交換をさせていただきましたが、自分たちの地域のことを自分たちで考えるのがまず大きな1つの意味があることなんだろうと思います。そのときに、例えば相談をされる方のメンバーについて、色々と人事で配慮されていると仰るような方もいらしたりして、どういう選定の仕方をするかを含めて、そこはまず地域でよくお考えをいただくところが地域として意味のあることだろうと思いました。

もう1つは、同じ土俵で同じようなものを作る、今回、地方創生ということで、これまで行政内部で作った計画は大して注目を浴びなかったですし、それがうまくできていようがないが、あるいはそれがうまく回ろうが回るまいが、大して皆さんから注目を浴びることはなかった。それが、同じ土俵に乗って一斉にどんと作ったものですから、ある意味うまくできているもの、それからできていないところ、それからそれを今後実施していけば、うまく実施できる自治体とうまく実施できない自治体という、ある意味、優劣がかなり明確に見えてきます。これまで検証ということが言われながらなかなかされていなかった部分についても、今後、第三者の目が入ってやっていくところで、今回、総合戦略を作った意味はあるのではないかと考えております。

やはり自治体だと自分たちの自治体の地域に発想が制限されるところがありますので、ある意味、地域間競争とか人の取り合いのようなことも出てくるということがあります。そういう意味では、このプラットフォーム、今後の進め方について、色々取組をしていたということですが、やはり色々な地域の連携という話は、まさにこういう場ではないとなかなかできないのかなというのが正直なところです。

例えば、観光であれば、富山県さんや長野県さんと組んで新しいゴールデンルートということで外国人観光客の方に来ていただく、あるいは南加賀と越前の共通の旅行商品を作るといった、個別事業、個別事業では連携を行っているのですが、なかなか全て連携がうまくいくというわけでもない。例えば、共通の周遊券を作ろうと思うと、周遊券を作って片一方の県にお客さんが行ってしまうのは嫌だということもあったりして、色々ありますので、こういう場で連携ということで、各県、あるいは各市町の取組を議論していただくのは、非常に意味があることなのではないかと思うところでございます。

それから、これは感想でございますけれども、例えば金沢周辺ですと、人が皆さんおい

でになりますので、仕事というのはあまり心配しなくていい。金沢周辺ですと、金沢においてになった方にどうやって住んでいただくかというのが施策の中心になってくる。

一方で、石川県は縦に長いので、七尾とか、あるいは小松、加賀の周辺だと、仕事も含めてどうやって人を連れてくるかという、仕事と定住がセットになっている部分があるのですけれども、そういうところで、地域によって抱えている問題も違うということがあります。

ただ、やはり基本となるところは、今いる方々にどう移動していただくかという議論が中心になってしまっていて、そうすると、結局出生率の向上になかなか議論が向かないということがあります。元々いる方を取り合うということに主眼が行ってしまうので、人を増やすというところに、これは難しいので、なかなかうまく向かない。

先程お話がありましたように、結婚のすすめということで取り組むことにしているので、すけれども、これもなかなか人の働き方や人生観があって難しいのですが、そういうところも少し根本から議論していかないといけないのかなと、地域としてもそういうことを議論していかないと、なかなか出生率の向上には向かないのだろうなと思った次第でございます。

それからもう1点は、人手不足がかなりあるのかなと思っています。ある地域でお話すると、工場が来てくれるというお話もあるけれども、やはりそこで50人、100人の仕事ができるときに、人をそこで用意できないという話があります。そうすると、やはりそういう話もなかったことになってしまうということで、地域によっては人手不足も相当あるということだと思いますので、そういったところも今後検討していく上で、気を付けなければいけないことだろうと思った次第でございます。

【座長】

各委員の御発言の共通事項で非常に興味があるのは、言葉として言いますと、七尾から氷見、近くて遠い、県域のハードルを下げる、3県が一体として、北陸3県として考える、北陸3県が手を取って、北陸3県が協力し連携して、北陸独立国等々。北陸を一つとして考えていく、こういうことが心の奥底にあるのではないかと、私の勝手な推測ですが、それが一番大きなことじゃないかと思っています。人口が減っていく中でそういうことをやっていく、また、いつまでも江戸時代を引きずってはいはだめなのでしょうね。そういうことで、自由にこのプラットフォームで議論をして、そして各県に持ち帰っていただいて、これが契機となって北陸州が始まればいいなど、私は勝手に推測いたしました。

私からもう1つ申しますと、これは以前にも申し上げましたが、人口減に関しては、人口が増加しているフランスの話を知るとということが非常に大切ではないかと思えます。聞きかじりの知識だけで言いますと、フランスは女性一人でも喜んで、胸を張って子供を産めると。そして、国が全力を挙げて支援しているということらしい。しかし、これはらしいであって、やはりそこはキチンと聞いて、そういう場を設けていただければ良いのではないかと、人口減についてはつくづく思いました。

もう1つ、北陸新幹線金沢開業から1年後の現状。これは、今度はネガティブエフェクトを、まず、最初にやっていく、そしてポジティブエフェクト。今までは観光業を中心にポジティブばかりでありますので、良いことと言いますが、何も関係ない一般市民はものが高くなったただけだと。将来、結果として税金が少なくなった、そういうところまでいけ

ば良いのですけれど、ネガティブのことを含めて、ポジティブになるような議論もここで必要でないかと私は感じました。

大学に携わる者として、金沢市は天下の書府・学都と言われてきたこと、もう少しそのあたりの、北陸全体は非常に品のあるところなのだということも、そのディスカッションの中に入れていただければ私としては大変うれしく思います。

以上